

地域に根付いた日本画家

長島町 西尾 楚江



1871年～1938年

は定評があり、木々に積もつたふくらした雪や、もの静かな風景は、他に類を見ないものであつた。

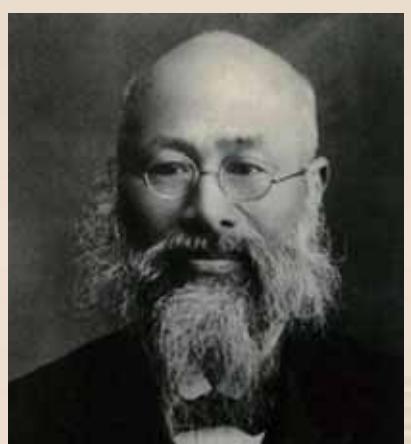
大正時代の中頃には、岐阜に住み、新聞の挿絵などを描いて活躍した。晩年は郷土にもどり、恵那地域の生活の汗がしみ込んだ画家として活躍した。特に木曽路で

楚江は、幼少の頃から絵が好きで、良い師に付き学びたいと願つていた。十八歳の頃、日本画の中心であつた京都画壇に飛び込み、京都府画学校で日本画の大家幸野模嶺に学んだ。その後、久保田米僊の門人となつた。

青年期には各地の美術展に積極的に出展し、多くの賞を獲得した。その後、各地を渡り歩いて研究を重ね、狩野派の流れをくむ日本画家として、独自の画風を確立していった。特に、楚江の雪景色に

学校林の生みの親

長島町 西尾 鎌吉



1867年～1952年

げ、明治二十三年には、いよいよ教育の森づくりに着手した。

生徒たちは、鎌をふるい、鋸を挽き、唐鋤を振り下ろして山の開発に取り組んだ。そして、明治三十八年、正式に長島尋常高等小学校林として発足することになった。

彼らの開拓精神、愛校心は次々と後輩に受け継がれ、現在の教育の森、長島小学校林を生み出したのである。

この学校林の造成に心血を注い

できたのが校長の西尾鎌吉だつた。

鎌吉には、数多くのエピソードがある。

背はひときわ高く、眼鏡をかけ、髭が特に立派で威厳があつた。ある時、一年生の修身を教える機会がある時、一年生の修身を教える機会があつた。子どもが怖がつてはいけないと自慢の髭を剃つてしまつた。これは鎌吉の教育愛の発露である。

鎌吉はこの入会山に入り、全域を調査し、詳細な計画を作り上

保古湖築造と開田事業の推進

東野 篠原 兵衛



1888年～1962年

大正四～五年頃、著名な県農業土木技師可知貫一技師（飯沼出身）より保古山に人造湖を築造する水田開発の計画が東野村長に提案された。

土木技師可知貫一技師（飯沼出身）より保古山に人造湖を築造する水田開発の計画が東野村長に提案された。説得により、激論の末、事業継続となり、組合長は兵衛となつた。

翌十四年、保古湖は県下第一の大人造湖として完成した。

開田事業は大正十三年に始まり昭和八年に完了した。その一年前に兵衛は組合長を辞しているが、當時役場書記の兵衛は、この事業は人口に比して耕地の少ない東野には必要と感じた。大正十年の工事施工主体「東野村東野耕地整理組合」創立総会で、組合長には永野鈴吉が、副会長兼庶務係には兵衛が任命され、事業推進の中心となつた。

工事は保古湖堰堤工事と導水路工事より着手されたが、着工後、保古湖堰堤下部より泥水の噴出が発見された。コンクリートで固め直して漏水は止まつたが、漏水が村人に与えた心理的影響は大きく、事業反対が高まり、組合総会開催となつた。兵衛の懸命な説得により、激論の末、事業継続となり、組合長は兵衛となつた。



1880年～1975年

『実験風穴蚕種の飼い方』
の著者で蚕種事業家

東野 伊藤 武右衛門

明治三十年後半から大正六年頃にかけて「日本」の風穴蚕種の村」と賞賛されたイメージの湧く姿は、現在の東野の風景からは、山本風穴顕彰碑以外見受けられない。

開田地分配についても「一事貫行」の精神で話しかけ、事業を推進した。この事業の記念碑にその概略が刻まれている。

當時、東野は三百戸足らずの村でありながら七十余の蚕種製造家があり、年間五万枚の蚕種を製造し、全国はもとより朝鮮半島、中國大陸まで売り出していた。明治四十三年、新愛知新聞（現中日新報）参考になる。

聞）が東海三県下から優れた蚕種家三十名を投票募集したが、この時の二等当選者が武右衛門である。彼は寡言にして柔軟な人柄であるが、父祖の事業を継承して二十余年を踏まえ、益々増加する風穴蚕種の夏秋蚕飼育の地域指導者としての責任感からみだしの著書となつたのであろう。

風穴蚕種の飼い方で見栄、欲望、軽率などの陥りやすい点を的確に指摘して、時にユーモアを入れた読みやすい本である。しかし、現在の東野を含めて恵那には養蚕は消えて蚕の飼い方を学ぶ必要性は低い。

武右衛門が指摘した、土地の気候風土を生かした事業づくりや、家屋と生活、農業諸道具購入時に陥りやすい点の指摘など、私たちの、これから生き方の心得として参考になる。

「熊崎式速記術」の考案者

三郷町 熊崎 健一郎



1881年～1961年

の需要に対して圧倒的に不足していた。こうした中、健一郎は独学で「熊崎式速記術」を完成させた。

中京新報社長はこれを知り、健一郎の速記技術を買って新聞記者として採用。新聞社社員として活躍する幕開けとなつた。その後、伊勢新聞社、大阪新報を経て、時事

明治十四年、野井に生まれた健一郎は野井尋常小学校に入学した。小学校卒業後は代用教員として勤めながら教員検定試験に合格

新報社に入社する。時事新報社では二十七歳の若さで大阪部部長に抜擢され、幹部社員として活躍した。

したが、健一郎の知識欲は強く、教員をすぐ辞め、明治三十年、單身上京した。

上京後は苦難の生活が続き、独学を余儀なくされた。ここで出合つたのが速記術であった。

速記術は明治時代、議会や出版業で必要とされた新時代の技能であつた。しかし、速記者の数は社会

三郷村営電氣事業の創始者

三郷町 足立 保幸



1877年～1941年

三郷公民館の庭に一基の碑がある。郷土の偉人『足立保幸頌徳碑』だ。

恵那地域の電氣事業は明治時

代の末期に始まつた。三郷村でも大正八年に佐々良木川に小さな発電機を設置したのが始まりだつた。

保幸は「何とか村中に電気がいきわたるようにならぬものか。」と考えた。しかし、そこには多くの障害があり、その第一は鶴岡電燈株式会社であつた。

時事新報社を退職し、運命鑑定所「五聖閣」を設立した。

当時三郷村への電気の供給権をこの会社が握っていた。保幸は名古屋の通信局に出かけたり、鶴岡電燈の実態調査をしたりして、粘り強い努力を続けた。その結果、大正十一年一月十一日に三郷村村営電気起業経営書が村議会に提出され、満場一致で可決された。そして、直

ちに保幸を委員長に三郷村電気事業建設委員会が設置された。工事も順調に進み、大正十二年七月には使用が認可された。

ここに保幸たちの努力がようやく実り、当時の村民の喜びと感激はひとときわ大きかつた。

足立保幸の自訓十則の一つに『進む世に おくれし我をかえりみて心に鞭をあててはげまん』とある。当時の保幸の心意気である。

武並町と郵便局を開設

武並町 田中 守平



1884年～1929年

美林を育てる基礎を築く

武並町 加納 熊吉



1851年～1933年

道真典」を完成させた。特に靈子

じゅつしゆそ

術の首祖としての精神的療法の施

術と青年活動は支持者を広めて

いた。その後、中国大陸に渡り蒙

古満鮮を巡教して大正五年帰国、

東京に太靈道本院を創設した。

大正九年、郷土開発のため武並の

地に総本院を建設する。内地、海

外から多くの人が訪れるが、駅も

郵便局もなく、来訪者や村民の不

便さを鑑み千五百坪の土地を寄付

して駅開設を図った。このことに

よつて近郷への道路が整備された。

また、郵便局は多額の資金を寄付

することで無集配三等局として開

設し、後に三郷村全域を含めた集

配局となつた。さらに総本院に電燈

を引いたことにより村全体にも広

まり、武並村が大きく変貌を遂げ

る原動力となつた。

立されている。

藤村の深萱紅坂に生まれる。

性格は剛毅質実有古士（顕徳碑に記載）と言われている。

明治二十八年、三十年、三十三

年と村議会議員に就任し、また、

区長、勸業委員、林業委員、表忠

碑委員等を歴任し、多くの功績を

残した。

幼少の頃より信仰にも熱心で

御嶽山へ毎年登頂し、五十回の記念碑を建立した。本人も「白悟靈

神」として神明神社前の靈場に建

て充當することが出来た。これら

すべての植林事業の基礎は熊吉の

督励と努力の賜として、その徳を

称え昭和十五年、藤区民により

顕徳碑が建立され、現在も感謝を

こめて祭典が行われている。

地域の開発と教育に貢献



1873年～1938年

便道（現恵那蛭川線）の実現に尽力した。また、木曾街道（現美濃加茂市～蛭川奥戸）の開通にも努力した。



1887年～1948年

たようである

三十歳後半より歴史や考古学に興味が推移し、郷土史の研究に没頭した。大正四年に御大典記念ごたいでんねん

河合村に生まれ明治三十九年、時代』を刊行し、学界に貢献した。兵庫県立蚕業学校を卒業した。青年時代から和歌を好み、雅号を「白泉」と称した。三十歳前後の文年、県の文化財の指定を受けていた。その出土品の「山本コレクション」は貴重な文化財として、昭和三十六

学青年時代には、尾上柴舟・金子薰園諸先生に師事して歌壇に飛躍し、前田夕暮・若山牧水などとも交わりが深かつた。また、昭和十三年『笠置村史』を編集。晩年笠置山をめぐる史跡の著書隨筆中、病に倒れ昭和二十三年九月二十九日没。

歌集『松の根ざし』『面影』『耽樂』などを出し、地方歌壇の一権威として多くの秀歌を発表した。特年、六十二歳で永眠する。その後、栄の功績を称え、昭和四十五年、恵那市教育委員会と笠置町振興

に家業が養蚕や製糸であつた関係上、この方面的著書は十二種もあつ

「笠置村史」を編集



笠置町 山本栄一
やまもと えいいち

学青年時代には、尾上柴舟・金子薰園諸先生に師事して歌壇に飛躍し、前田夕暮・若山牧水などとも交わりが深かつた。また、昭和十三年『笠置村史』を編集。晩年笠置山をめぐる史跡の著書隨筆中、病に倒れ昭和二十三年九月二十九日没。

歌集『松の根ざし』『面影』『耽樂』などを出し、地方歌壇の一権威として多くの秀歌を発表した。特年、六十二歳で永眠する。その後、栄の功績を称え、昭和四十五年、恵那市教育委員会と笠置町振興

に家業が養蚕や製糸であつた関係上、この方面的著書は十二種もあつ